

# むきばんだ花だより

1月

2017. 1. 7

## 「御慶交はず遺跡の丘の晴れわたる」

もと

◎セントウソウ(仙洞草-先頭草)、セリ科、

セントウソウ属、別名：人参草、オウレンダマン。  
柔らかで小柄な多年草でセントウソウ属にはこの種しか含まれず日本固有の単形種となっている。北海道から九州まで分布する。○名前の由来：日本名の由来はわからない「牧野植物図鑑」とされていますが、人里離れた仙人の住まいを「仙洞」といい、そのようなところに自生していると言う説や、この花は他の花々に先駆けて咲くことから、「先頭」を切って咲くという意味説、等もあるそうです。また、別名の「人参草」、「オウレンダマン」は、葉が人参や、セリバオウレン(芹葉黄蓮)の葉に似ていることから。○花言葉：「繊細な美しさ」。春先3月ごろから白い小さな5弁花の花が咲きます。

**花を拡大してよく観察して下さい。何故か花弁の向きが不揃いで正五角形になっていません。花後の果実は2分果です。子房が2つあります。**

○夏を除いて、一年中採集できる、食べられる草花です。(アク抜きして酢味噌和え、ゴマ和え、天ぷら等)

★撮影日：2017,1,7、★撮影場所：イベント広場横



◎タチチコグサ(立父草)、キク科、ハハコグサ属・

別名：チチコグサモドキ、ホソバナチチコグサ、  
1900年代初め頃渡来した北アメリカ原産の帰化植物。褐色の小花がチチコグサに似ており、莖上部の葉の脇に花を何段にもつけて立つ姿から名付けられた。

花言葉：父に似た人～納得～。チチコグサ、ハハコグサは在来種です。大正時代以降に同属の仲間(ウラジロチチコグサ、ウスベニチチコグサ)が渡来しています。

○同属の「ハハコグサ(母子草)」は春の七草でオギョウ(又はゴギョウ)と呼ばれています。

★撮影日：2017,1,7、★撮影場所：イベント広場横



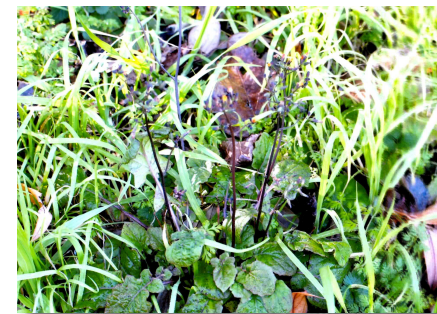
◎オニタビラコ(鬼田平子)、キク科、タンポポ属科、  
越年性のタンポポ連、オニタビラコ属、日本全国、朝鮮、中国に分布する。1年草。葉を含め全体に細な毛を密生する。葉は地面に近くロゼット状に付き、茎は高さ20～100 cm程にも生長し、上部が複散房状に分枝し黄色の花を多数、暖かい地方では年中咲かせます。

別名：ヤクシソウ(薬師草) ○4月の初旬頃から田の中や畦、道端にタンポポを小さくした様な「タビラコ」と名の付く花々が咲き始めます。タビラコ、ヤブタビラコ、オニタビラコ、の三種類です。タビラコは田の中や畦、ヤブタビラコは藪や田の畔生育しますが、オニタビラコは道端・川岸等どこにでも育つ種類です。

名前の由来：タビラコの葉は無毛であるのに対し、全体に短毛が生え、花は小さいのに固まって沢山咲き全体像が大きい。また根が頑丈で、抜いても抜いても出てくるので大変嫌はれる植物です。○花言葉：仲間と一緒に、純愛、想い、～花の名前や嫌われ植物なのに不似合な花言葉ですね！

○タビラコ「オニタビラコ(小鬼田平子)」は、七草粥に入れる春の七草の1つで、「ホトケノザ(仏の座)」であると云われます。タビラコのロゼット状の葉を仏の台座に見立てたものようです。今の「ホトケノザ(仏の座)」はシソ科の全く別の草花です。

★撮影日：2017,1,7、★撮影場所：イベント広場横

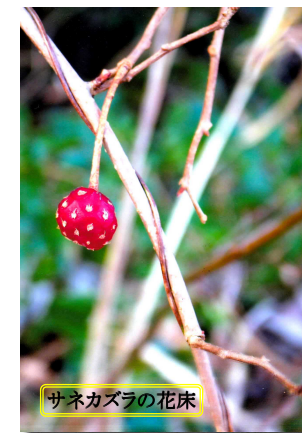


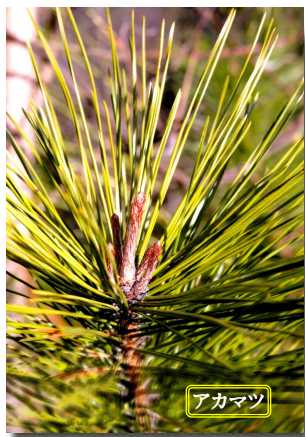
◎クサイチゴ(草苺)、バラ科、キイチゴ属

別名：ワセイチゴ(早生苺)～花が咲いたと思ったらすぐに果実がなるので早生苺。名前の由来：キイチゴの仲間なのに、一見すると草のように見えることから。○花言葉：幸福な家庭、尊重と愛情、誘惑、甘い香り、恋愛成就。

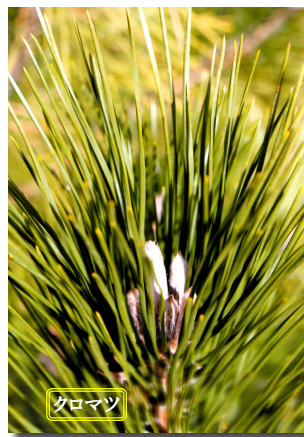
本州以西から朝鮮・中国に分布します。果実は5～6月頃赤く熟し甘くて美味しい。生食、ジャムに好んで使われます。

★撮影日：2017,1,7、★撮影場所：洞ノ原地区東側丘陵





アカマツ



クロマツ

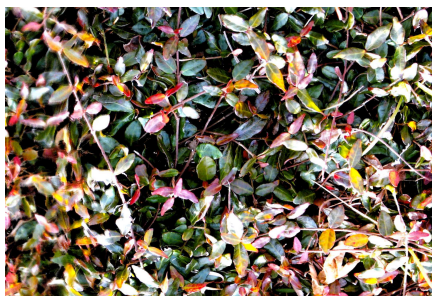
◎マツ(松) マツ科、マツ属 別名:トキミグサ(時見草),トキワグサ(常盤草)

名前の由来:神を「待つ」、「祀る」や緑を「保つ」が転じ出来た等の説があります。東アジア圏では神の降りてくる樹や不老不死の象徴として珍重されることを考えると「待つ」から転じた説がいくらかにもそれらしく思えます。花言葉:不老長寿、勇敢、同情、永遠の若さ、向上心、哀れみ、かわいそう、慈悲。(赤松は気高さ)。○マツ属の天然分布は赤道直下のインドネシアから、北極圏に至る、ほぼ北半球全体で、針葉樹としては最も広い範囲だそうです。日本に広く分布するアカマツ・クロマツは、芽出度い樹として、竹、梅と共に生け花や正月飾りは欠くことが出来ません。  
\* 歩く会でクロマツ(雄松)・アカマツ(雌松)の見分けが難しいと、会員の話がありました。～参考になれば～クロマツは海岸や砂浜など海辺に多く、幹は荒く乱れたようで黒灰色。新芽の色は冬芽が白く葉が全体に強くて固い。アカマツは内陸、山に多く(むきばんだ公園に多い)。幹は皮の亀裂が比較的綺麗で色は下部が暗褐色上部が赤褐色。新芽の色は冬芽が赤く葉は優しく柔らかい等です。門松の飾り方にも「内飾り」、「外飾り」とか、黒松と赤松の置き方も向かって左に雄松(クロマツ)、右に雌松(アカマツ)を置くのが決まりになっているそうです。

★撮影日:2017,1,7 ★撮影場所:洞ノ原地区東側丘陵

◎テイカカズラ(定家葛)、キョウチクトウ科

キョウチクトウ亜科、テイカカズラ属、蔓性常緑低木。  
\* 有毒植物。名前の由来:式子内親王を愛した藤原定家が、死後も彼女を忘れられず、ついに葛に生まれ変わって彼女の墓に絡み付いたという伝説(能「定家」)に基づく。花言葉:依存、荣誉、優雅、優美な女性、爽やかな笑顔、幼木の間は地上を這いまわり地面に葉を並べる。この時期の葉は深緑色で葉脈に沿って白い斑紋が入ることが多い。葉を切ると白い乳液が出る茎から気根を出して他の物に固着するようになる。～以下略～  
★撮影日:2017,1,7 ★撮影日所:洞ノ原地区環濠内



リュウブの冬芽と花ガラ



ハゼの実



◎ヒノキ(檜)、ヒノキ科、ヒノキ属、常緑高木。雌雄同株、雌雄異花。別名:マキ(真木)、ヒ(檜)、扁柏。花言葉:不滅、不老、不死、強い忍耐。○日本と台湾のみに分布し日本では本州中部(福島県)以南から九州まで分布する。\* 日本書紀に「スギとクスノキ」は舟に、ヒノキは宮殿に、マキは棺に使いなさい。」と書かれているようで、古くから宮殿建設用に最適で最高の材として知られていたのです。名前の由来:「ひの木」の意味で古代に火起こしに使われたと云う説と、尊く最高の物を表す「日」をとって「日の木」と云う説もあるそうです。近代には人工林として多く植栽され、日本では木曾に樹齢450年の木もあります。材は建材として最高品質で加工が容易なうえに緻密で狂い難く、日本人好みの強い芳香を長期にわたって発する。正しく使われたヒノキの建築は1,000年をえる寿命を保つと云われます。  
★撮影日:2017,1,7 ★撮影場所:洞ノ原地区西丘陵

◎ネジキ(振木)、ツツジ科、ネジキ属。

落葉小高木。原産地は日本。本州、四国、九州の低山から山地に自生する。同属のアセビ同様有毒(癌變毒)なので注意。別名:カシオジミ、カシヨセ。～(由来不明)、アカギ、アカメ、スリバン、～(由来は冬新梢が綺麗な赤色になるから)  
○花言葉:悲しみの涙  
○名前の由来:幹が振れているから。太い木では白っぽい褐色の樹皮が、縦に細長く剥がれるので振れているのが好く判る。材そのものも振れているため、かつて燃料を薪に頼った頃は、斧の刃がまっすぐ入らず割りにくい木として有名であった。開いたばかりの葉は赤味を帯びて綺麗、花は5～6月に、前年の葉腋から、総状花序を出し、白い垂状の花が多数、下垂して咲く。花は、下向きに咲くのに実(蒴果)は上向きに着く、一年枝や冬芽は黄色～紅紫色で艶があり美しい。冬芽は先端がややとがり、2枚の赤い芽鱗が向かい合う。  
★撮影日:2017,1,7 ★撮影場所:洞ノ原地区



イボタンキ



イボタンキ

★むきばんだを歩く会★

- 指導: 鷲見寛幸先生(鳥取県自然観察指導員)
- 毎月第1土曜日午前9時30分～正午
- 入会金 2000円 毎回資料代 300円 いつでも、どなたでも入会可能です
- 問い合わせ: むきばんだ応援団「むきばんだをある会」